

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。1

その 350

先天十七個の言霊が活動を開始し、言霊イ弌である伊耶那岐・美の二神が夜這いして子（子音）を産む行為が始まることとなりますが、古事記では、まず最初に子生みの失敗談が披露されます。人間精神の原理の話がいよいよ佳境に入ろうとすると、なぜ失敗したことなどが語られるのでしょうか？ それは古事記神代の巻きが、人類の文明の歴史を深く洞察した上で書かれたことの証明にもなることなのですが、それは話が進むにつれて明らかになり、著者太安万侶の深謀遠慮に驚かされる事と成ります。さあ、古事記の文章に帰りましょう。

古事記本文

ここにその妹伊耶那美の命に問ひたまひしく、「汝が身はいかに成れる」と問ひたまへば、答えたまはく、

「吾が身は成り成りて、成り合わぬところ一処あり」と まおしたまひき。ここに伊耶那岐の命のりたまひしく。

「我が身は成り成りて、成り余れる。ところ一処あり。故この吾が身の成り余れる処を、汝が身の成り合はぬ処に刺し塞ぎて、国土生み成さむと思わすはいかに」とのりたまえば、伊耶那美のみこと答へたまはく「しか善けむ」とまおしたたまひき。

ここに伊耶那岐の命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と、この天の御柱を歩き廻りあひて、美斗の麻具波比せむ」とのりたまひき。かく期りて、すなわち詔りたまひしく、「汝は右より、廻り逢へ。我は左より廻り逢はむ」とのりたまひて、約り竟へて廻りたまふ時に、伊耶那美の命まづ「あなにやし、えをとこを」とのりたまひ。後に伊耶那岐の命「あなにやし、え娘子を」とのりたまひき。おのおのものりたま竟へて後、その妹に告りたまひしく、「女人先立ち言へるわふさはず」とのりたまひき。然れども隠処に興して水蛭子を生みたまひき、この子は葦船に入れて流し去りつ。次に淡島を生みたまひき。こも子の数に入らず。

### 吾が身は成り成りて、成り合わぬところ一処あり

古事記の最初の文章を「天地の初めの時、高の天原になりませる神の名は・・・」にありますと同様に、「成り成りて」の成りは「鳴る」の謎であります。そうでないと、古事記が言霊原理の教科書であることから離れます。

母音であるアオウエイそれぞれの発音をしてみてください。同じ音がずっと続いて変化がありません。このよ  
うなことを仏教では梵音と呼ぶ大自然・大宇宙のことなのです。それは音が続いている限り開いたままで  
合う事がないので、「鳴り合わざる音」と表したのです。成り合わぬ状態を女性の成り合わぬ陰部  
に譬えたわけでありませぬ。

その 351 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗 2

その 351

**我が身は成り成りて、成り余れるところ一処あり。**

古事記のこの文章の「我」は伊耶那岐の命です。けれども「我が身」とは伊耶那岐の命である言霊イその

ものではなく、伊耶那岐の命の実際の働きである八つの父韻キンチニヒミイリのことであります。この八つの

父韻を発音してみますと音が二段階となっていて、イという音が余韻となって続く事に気づかれるでしょう。

これが鳴り（成り）余れる音（一処）というわけです。

イ言霊は五つの母音の一つであり、同時に八つの封印父韻に展開して創造の韻となって活動して父母

音の両方性質を持っていることから、言霊イを親音と呼んで単なる母音と区別しているのです。この成り

余れる音であります父韻を男根の成り余っている姿に譬えて示したのであります。伊耶那岐・美の両命の

<sup>よぼ</sup>婚いによって言霊子音を生む子生みは、巧みに男と女の生殖の行為に譬えて説かれています。言語の

発音も男女の生殖も共に人間生命の唯一の道理の発現でありますから、比喩が誠にぴったりと当てはまることと成ります。

注一、父韻は読んで字のごとく韻であって音ではない。心の最奥部に瞬間にひらめく精神の火花といつたらよからうか。古代の文字すなわち神代文字を見れば容易にわかることであるが、父韻の姿はローマ字を以て表すと理解し易い。

八父韻キシチニヒミイリは k s t n h m y r と表される。韻だけでは発音することができない故、末尾に母音イ (i) をつけてキシチニヒミリと発音する。創造知性の韻にイ音をつけて発音すること、さらに父韻の発音に他のアオウエの四段を用いず、イ段を採用したことの二つの事柄は言霊布斗麻邇の原理の最も重要な特徴である。それは五十音言霊による人間精神の理想的構造図

が完成する時、明らかにその正当性が証明される。

注二、伊耶那岐の命・言霊イと伊邪那美の命の婚いによる結合が実際には八つの父韻と四つの母音の結合として述べられることに不信を感じる読者も多いと思われる。それは、この文章のすぐ後に出てくる「天の御柱を廻る」段で詳しく合理的に説明される。

その 352 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。3

その 352

この吾が身の成り余れる処を、汝が身の成り合はぬ処に刺し塞ぎて

この文章は勿論男女の体の結合にこと寄せて言葉の発音のことを述べているのである。父韻を母音の中に刺し塞ぐようにして発音すること。父韻キと母音アでキア（ $k+a$ ）＝カとなります。同様にキエは（ $k+e$ ）＝ケ、キウは（ $k+u$ ）＝ク キオ（ $k+o$ ）＝コとカ行の音が生まれます。五十音図の他の七行も同じようにして発現して来ます。

### 国生み成さむ

国土を作るのではなく、言霊を産むことであります。ここでは特に子音を創ること。「くに」とは前に説明したことがありますが、「組んで似せる」ことです。何に似せるか、というと、物事の真実の姿に似せて、そのものズバリの言葉の要素を造ることです。

今迄の処は心の先の天構造ばかりを説明してきました。先天のことですから、五感感覚で接触することができない、姿を持たない世界のことでした。日本書紀の言葉を借りますと「兆しを含み、薫が満ちている」先天の要素が漂っていて、目に見える何物も発現していない先天宇宙の中から初めて後天現象の要素である子音が生まれ出ようとするのです。この時、先天の要素を天名と言い、後天の要素を真名または真奈と呼びます。

子音である真名は先天父母音で組まれた<sup>く</sup>国土<sup>に</sup>ということになります。日本書紀に「善きかな国のありけること」とありますように、言葉は文明の始まりであり、人間の集団としての国の始まりです。この時、その言葉がどのような言葉であるかによって、国柄が定まって来ます。人間誰も将来授かっている心の先天構造の原理に則って言葉が造られ、その造られた言葉が示す真実の実現へとして肇られた国家が世界でただ一つあります。その国の名は「靈の本」即ち日本であります。靈の本とは人間の生命法則そのままの言葉を保持している国、という意味であります。



日本や世界が今後困難な事態に遭遇し、絶望の淵に沈もうとする時があっても、それを乗り越えて人類の新しい生きる新しい道を発見することは可能なのです。それは「いざ」という時 心を虚しくして人間の創造意志が働く瞬間の時点（中今）に帰り、そこから発動する創造意志のままに発せられる言語の指し示す道に気付くことです。日本語とはそういう言語なのであります。

その 353 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。4

その 353

「然らば吾と汝と、この天の御柱を歩き廻りあひて、美斗の麻具波比せむ」とのりたまひき。

天の御柱とは先に説明しましたように、母音アオウエイの縦の並び、これに対し国の御柱とは半母音ワヲウ

エ中のことです。この御柱とは古事記の大方の注釈にありますような「家屋の中心となる神聖な柱」という現実的な家の柱のことではありません。

心の柱です。心はアオウエイ五母音言霊という五段界層の構造の宇宙を住家としています。これが天与の人間の生命の拠り所でありますので、家屋の大黒柱にたとえたわけであります。天の御柱・国の御柱と並べて言う時は、天の御柱とは純粹の主観、国の御柱とは純粹客観を意味しています。

では、この天の御柱を岐美二神が廻って美斗の麻具波比（結婚）をする、ことはどんなことを言うのでしょうか。ここで先の「注」で指摘しておきました岐（イ）・美（中） 二の命の結婚がなぜ父韻と母音の結合となるかの疑問に答える時となります。これもまた先にお話したことですが、物事にはすべて相對観と

絶対観という2つの見方があります。

夫と妻と対立しているとする立場と夫妻が一体となり、夫婦として行動する立場との二つです。話が理屈っぽくなって恐縮なのですが、ここは我慢してお読みください。わかりやすくするために、左に図で相対観と絶対観の立場を示しておきましょう。相対観とは、伊耶那岐の命イ（ウオアエ）と伊邪那美の命（ウヲウエ）とが対立している状態です。

図の上がそれを示しています。それに対して絶対観の立場では、岐の命と美の命が一体となった状態です。

下の図で示されます。この場合、岐の命（イ）（ウオアエ）と美の命（（ウヲウエ））は一体となり。

陰陽の陽、能動と受動の能動、主と客の主である岐の命イ（ウオアエ）を以て表す事になります。その

場合の天の御柱というのは、単なる天の御柱ではなく、その中に国の御柱も含んでいるということです。

その 354

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。 5

その 354

以上の相対観と絶対観という立場を頭に入れておいて、「吾と汝と天の御柱を行き廻りあいて」ということを考えますと、次のようになります。すなわち、相対観の立場では「イ・アオウエ（天の御柱）とワヲウエ（国の御柱）が創造意志の火花（律）の媒介によって、お互いに感応同交すること」であり、絶対観の立場からすれば宇宙の实在であるアオウエ・イに岐の命と美の命との間に閃く創造意志の火花が働きかけて、实在である子音を現象として表す」ということになります。

「吾と汝と天の御柱行き廻りあいて」という古事記の表現は、主として右の図のうちの絶対観の立場を頭に置いたものでありましょう。

注一、 古事記は後章にて伊耶那岐・伊耶那美の命が一体となった状態を伊耶那岐の大神と言って、単なる伊耶那岐の命（神）と区別している。古事記禊祓の章参照

注二、 言霊イの展開であるヒチシキミリイニの八つの父韻は妹背、陰陽、作用反作用という一対・四組の韻律であることはすでに説明した。絶対観の場合は、天御柱を廻る八つの父韻の内、能動であるヒチシキの四音が技の命の側であり、ミリイニの四韻が受動の美の命の側である。

「美斗の麻具波比せん」とは現代語で言えば「結婚しよう」ということであります。日本書紀には「邁合為夫婦」「交の道」と書かれています。邁合は交合のこと、夫婦の交わりの意味です。麻具波比は「招ぎ合い」の意味でしょうか。交は十作でイ・キシチニヒミイリ・牟のの交流を言います。武内古文献には「ミトルツナマグハヒ」と記せられています。陰陽の綱を招ぎ合って、𠄎繩（七五三繩）を編んでいく精神の法則に通じます。このことについては後章でお話します。

その 355 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。6

その 355

**汝は右より、廻り逢へ。我は左より廻り逢はむ**

「伊耶那美の命は右より廻れ」と言った。右は身切りの意味で女陰の形であります。天の御柱を右廻りに廻り、父韻ミリイニの役目を負え、という意味です。それとは反対に、伊耶那岐の命は左より廻って父韻チキヒシの役目をする、ということ。左（ひたり）は霊足るの意味で男根を意味し、能動を積極性を表し

ます。技美二神がそれぞれ成り余れる処と成り合わざる処の役目を負うことによって物事の現象が生じます。

#### 女人先立ち言へるわふさはず

女が男より先に発言したことは適当でないの、意味。これは何も男女の優劣・順序を言っているわけではありません。現象である子音を生もうとして母音を先に発音して父韻を後にしたのでは子音は生まれません。

だから適当でない、ということでもあります。例えば、父韻 k

を先に発音して先に、母音 a を後にすれば「か」=k+a という子音が生まれるが、母音を先にしたのでは

a・k で子音は生まれてこないということになります。

右の例は言霊学の子音を生む事に関する説明ですが、これを人間の創造行為に検討してみましょう。人が何かしようとする時、「人間とは、そも何者か」という、本来宗教・哲学が扱うべき心の先天構造の中の母音である生命の宇宙実在などの問題を第一に考え、実践創造意志である父韻の発現を無視したのでは、人は創造の第一歩を踏み出せないことになります。自我の本性を見定めようとする小乗信仰の立場から実相である文明創造の意欲は湧いてこないということになります。これも「女人先たち言えるは、ふさわず」ということです。

その 356 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。7

その 356

然れども隠処に興して水蛭子を生みたまひき、

隠処とは組む所の謎であります。言葉が頭脳内で組まれる所のことで、そこは隠り神の居る所であります

から、「隠」の字が使われています。水蛭子の蛭は骨（はね）のない動物。水蛭子はまたは霊流子とも



読めます。 霊である父韻が流れてしまって実相の子音が生まれて来ないことを示します。何故なら母音を先に発音し、母音である個人の心の内部の悟りばかりこだわるからです。

この文章の初めに、「然れども」とあります。「女人先立ち言えるはふさわず」、適當ではないと言って、尚かつ水蛭子を産んだのはなぜでしょうか？ 母音である小乗的な悟りに拘泥しては、実相は生まれてこないと知ってはいても、しかし人間にはそういう状態もありうることでありますから、 とりあえず水蛭子も生むことにしましょうというわけであります。

」

事実、世界をここ三千年間日本においては二千年間物質文明創造の時代であり。 弱肉強食・生存競争の社会が続きました。弱者である一般民衆は戦乱怒濤のただなかにあつて、せめてもの心の平安を

求めて、小乗的な信仰や思索の中に身を投ずるより方法がありませんでした。長い人類の歴史の中では人間のそういう態度も必要であったわけでありませぬ。

注一、 隠処とは頭脳内で言葉が組まれるところ、と書いたが、それは実際に何処か。後章古事記の子音創生の中で明瞭に指摘される。古事記が上つ巻の神話は人間の心をすべて残すところなく解明しているのである。

注二、 生存競争社会の只中であって、平穩を求めて心の真の实在を探求する宗教に仏教の禪や念仏等などがある。それらの信仰からは「安心」は得られても、この世の政治・経済の仕組みを転

換して理想社会を建設しようという積極策は生まれてこない。このことを水蛭子の状態というのである。法華経を奉じて日蓮宗を興した日蓮上人は「念仏無間、禅天魔」と叫んで実相実現の法華経を奉じ宣伝した。その消息は法華経第七化城喩品等（無間とは無間地獄のこと）。

その 357 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。8

357

**この子は葦船に入れて流し去りつ**

「女人先に立ち言へる」実相を産むことのない心の持ち方ではあるけど、場合によってはそれも人間に有り得ることであるから、成り行きのままに、自然のままに世界に流布させたと意味であります。

「葦船に入れて」の葦舟とは言霊五十音図のことです。「葦船に入れて流し去りつ」とは言霊図に照らし合わせて、それも人類全体の歴史としては必要なことである、と承認して世界に流布・教伝させた、の意味となります。

この事を日本書記には「天の磐楡樟船に載せて、風の順（まにま）に放ち棄つ」と書かれています。天の磐楡樟船とは五十音言霊（磐）を組んで澄ました図形の謎であり、言霊図のこととなります。言葉は心を運ぶもの、ということで、船に譬えます。

事実、水蛭子この思想が世界に「流し去った」結果が母音を先に発音することによって発生した東洋にお

ける五行・五大の考え方、また禅の空の悟り、念仏やキリスト教に見られる個人の魂の救われを求める各  
種宗教の発生等であります。これらの心の持ち方が、三千年の暗黒の世を支えてきたとも言えるのであり  
ましょう。

注一、 葦舟がなぜ言葉五十音図を示すことになるのかは、後記「五種類の言霊図」の中で明らかにされる。我が国の古い名前であると豊の葦原瑞穂の国の葦も同様な意味である。

その 358 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

創造へ、そして失敗。9

その 358

**次に淡島を生みたまひき。こも子の数に入らず。**

水蛭子次に淡島を生みました。これも心の先天構造の活動から正統に生まれてきたものではないので、

「子の数に入らず」となります。さて、淡島とはアとワの締まり、ということです。アとワ、主体と客体の対立

から生まれてくる心の現象とは何なのでしょうか？

普通心の先天構造である天津磐境（あまついわさか）では、宇宙が分かれて下の図のようになります。

このことは。今まで何とかなく説明しました。はじめに意識の萌芽とも言える言霊ウが生まれ、これに何

かの思考作用が加わると、その瞬間に主体と客体、アとワに分かれるということでありました。淡島とはウ

ア・ワの割半（わかれ）ではなく、己にアとワに分かれたところから思考が始まる心の持ち方のことをいって

いるのです。

お話しますと読者は前章の思うと考えるの違いについての話を思い出すのではないのでしょうか？ そう

です。アとワ、私と貴方の対立したところから心の作業がはじまると、「神帰る」の考えるという働きとなります。哲学的に言うと、正反合の弁証法思考です。私を「正」とします。貴方がそれとは違った立場に立っています。これが「反」です。この正と反との対立が起これば、当然この二つのものを統合して双方が容認できる立場が要求として心の中に出てきます。その終着点が「合」というわけです。

学問の立場から正と反の対立から合の結論を引き出すことは出来ます。けれど、実際の生命現象や社会現象では、その終着点に行き着く道程は時の経過に委ねられることとなります。マルクスの唯物弁証法は、労働階級と資本家階級との対立が闘争の結果、労働者の勝利に帰すと宣言し、その闘争はすでに 100 年の歳月が過ぎました。にもかかわらず、まだ決着がつかぬ所か共産主義国家の崩壊が次々と起こっているのが実情です。弁証法的な考え方には学問上の推理はあっても、その結果を招来する手段・経過の道、すなわち原因と結果を結ぶ架け橋である八つの父韻の原理の自覚が据わっていないためであります。淡島のものの考え方に淡い望の「淡」が使われている理由なのです。

淡島が先天構造の原理から正統に生まれた心の持ち方で無い事がお分かり頂けたことでありましょう。

その 359 につづく

